

V o i c e III

創立記念日特別号

森村学園高等部 3 年生
学年通信 No.4
令和 4 年 4 月 25 日発行
(創 造 舎)

■ こだわりの宝石箱～長津田森村高等部・修学旅行～ ■

森村学園が長津田キャンパスに移転をしてきたのが 1978 年だ。それからすでに 40 年以上の年月が経過したことになる。そのころいらした先生方もすべて学園を退職なされ、すでに高輪から長津田に移転したこと自体が歴史の中の出来事として語り継がれることもほとんどなくなってきた。そこで、今年の創立記念日は「森村学園」自体にフォーカスして、取り上げることにした。そのテーマは「修学旅行」である。歴史や経緯を紐解いてみると修学旅行には先生方や生徒たちの数々のこだわりが詰め込まれているものであることが良くわかる。長津田移転以降の修学旅行がどんなこだわりでどのようなものが出来上がり「今」の修学旅行につながっているかを取り上げる。筆者は長く高等部に在籍していたこともあり、高校の修学旅行を中心に示す。

1. 修学旅行の行き先

各期事にどこに行ったかをまとめると次の表のようになる。

中等部		高等部	
期	行き先	期	行き先
～78 期	名古屋・岐阜・北陸	～67 期	(1) 京都・奈良・倉敷 (Ivy Square)
79 期～89 期	京都・奈良	68 期～89 期	(2) 九州
90 期～	(3) 海外	90 期～	(4) 京都・奈良

2. 修学旅行のこだわり

(1) 67 期以前 京都・奈良・倉敷 (Ivy Square)

長津田に移転したばかりのころ、男子は長津田キャンパスに移転したものの女子は高輪キャンパスに残った。完全に移転が完了するのに 2 年の歳月を要した。移転が完了することで、長津田校舎には旧女子部、旧男子部と高輪では全く別の校舎で教鞭をとっていた先生方が新たに中等部、高等部という組織に再配属されて教育活動をスタートすることになった。そこで、修学旅行の行き先についてだが、もっぱら旧女子部の先生方が「京都・奈良」を担当し、旅館などの選定を含めて強く森村の独自性を打ち出した。旧男子部の先生はさらに「倉敷 Ivy Square」を提案し、その結果がこのコース設定につながった。それぞれの良い部分を合わせた修学旅行が誕生した。当時の修学旅行事情から考えると、信じられないほど格式の高い旅館やホテルに当時の森村生は宿泊し、現地の人たちを驚かせたと聞く。

(2) 68 期から 89 期 九州修学旅行

(1)の修学旅行は移転の影響もあって、プログラムを通して生徒に何を伝えるかに関しては明確なポリシーが打ち出せない部分もあった。そこで、当時の高等部の先生方は「教育目的」を明確に打ち出した修学旅行の構築に取り組んだ。いろいろな場所が候補に挙がった中で最終選考に残った

のが九州修学旅行だ。この旅行を通して「自然・歴史・文化」を学ばせたいと、特に社会科の先生たちは熱く語った。自然はとりわけ西日本を形作るほどの大噴火を起こした阿蘇山が目的地に設定された。歴史・文化については、九州の行政の中心となった大宰府、隠れキリシタンの歴史を色濃く残す地域（平戸）、江戸時代の唯一の海外に開かれた地であり、平和を深く考えさせる地（長崎）が選ばれた。九州に移動するあたって飛行機を利用したのも画期的な出来事であった。

こうしてスタートした修学旅行に対して、その後の学年も様々なこだわりの企画を注ぎ込んだ。スタートから2年後の学年（70期）は、ブルートレインを利用して九州に入ることを企画した。夜明けのころにちょうど関門海峡を渡り、朝焼けの九州を目にすることができた。心地よい疲労感とその景色で、旅情をかきたてられた。（生徒には好評だったが、引率した先生方にはちょっと負担が大きかった。翌年から往復飛行機移動に戻った。）また、その年に阿蘇のカルデラ

の中に広がる草千里で、初めての学年全体写真を撮ることが計画された。カメラマンの号令のもと取られた写真は思い出深いものとなった。その後、学年全体写真は修学旅行で



（天候が許せば）必ず撮影されるようになった。（写真は77期の修学旅行：阿蘇草千里）

(3) 90期～（中等部） 海外修学旅行（イギリス、ニュージーランド）



中等部高等部で別々のポリシーのもとで行われていた修学旅行は1997年の中高一体化がきっかけとなって大きな転機をむかえた。修学旅行を中高6年間の間に生徒に対して何を教育し、何を体験させるかを考えることになった。森村学園の創立者森村市左衛門翁の建学の精神などを盛り込み、世界で活躍できる人材となるべく「中学生という早い段階では異国の文化や歴史に触れて刺激を受けさせる。そして高校生となってからは海外に日本を発信できるような経験、体験を行う。」という方向性が決まった。そこで、中学生の修学旅行先としてイギリスが選ばれた。イギリスの中心地であるロンドンはもとより、湖水地方など広い地域をめぐることで多くの刺激を受けさせることを目指した。物見遊山の旅行にならないように、現地で交流校を探した。かつて森村の中等部の英語教員として勤めた先生がイギリスのハイスクールで日本語教員をされていた縁をきっかけに交渉を行い、半日の交流プログラムをその学校で行うことが企画された。茶道、折り紙、書道などの日本の文化を現地の高校生に伝える企画のほか、ホールに集まって、合唱、和太鼓、大道芸、ソーラン節、新体操などを披露し、驚きと大喝采を得るに至った。こうして当時の中学生は多くの刺激を受ける旅行を経験することになった。イギリスへの移動ということで、万一の事故に備え、本隊を2つに分けて現地入り、帰国するという配慮もそこに注ぎ込んだ。（写真は90期イギリス修学旅行）



（写真は90期イギリス修学旅行）

翌年も同様にイギリスの修学旅行を行うはずであった。ところが思ってもみないことが欧米圏で起こり始めていた。それは、テロである。ロンドンでもバスが爆破されるなど緊張感が世界を走っていた。結果としてイギリスに変わる経験ができる安全な海外の旅行地を探すことになり、選ばれたのがニュージーランドである。そのプログラムの中に組み込まれている内容をみれば、原点がイギリス修学旅行であることは容易に想像がつかだろう。ニュージーランド修学旅行に関しては飛行機を2便に分けることは行わなくなった。(写真は105期ニュージーランド修学旅行)



しかし、このニュージーランドの修学旅行すら阻まれたことがある。2009年の新型インフルエンザと、コロナウイルスのパンデミックだ。新型インフルエンザの際は国内(沖縄)修学旅行が代替案として実施されたがコロナ禍の影響の2019年~22年は実施できなかった。

(4) 京都・奈良修学旅行

これは、105期の諸君も経験した修学旅行である。

修学旅行の行き先のことを誰かに聞かれて、話をすると多くの人がそれを聞いて「逆じゃないですか」と尋ねてくる。高校の修学旅行に対してよほど思い切ったことを実行しない限り、その感覚はぬぐうことはできないだろう。そこで、旅行の内容を企画するとき、高校生には「日本の文化の深さを学び、経験する」修学旅行を行うという必要が生まれた。

そこで、当時の担任集団が目標に置いたのは「高校生でないとわからない京都・奈良」を経験させるということであった。中学生が感動する京都から、さらに成長した大人が理解できる深遠な京都・奈良を経験させる方策を打ち出すために何ができるかを決めなければならなくなった。

そんな時に、力を貸して頂けることになったのが京都醍醐寺の仲田氏だ。修学旅行の際に君たちに法話を話してくれた方のお父様にあたる。仲田氏は森村学園が高輪から長津田に移転してくる時の様々な問題の解決に多大な力を発揮してくれた方だ。この方なくして森村の移転の成功はあり得なかったといっても過言ではない。仲田氏に高等部の京都・奈良修学旅行のことをざっくばらんに持ち掛けた「中学でイギリスを経験した生徒達が高校生になって京都に行くときに、『なんだ国内か』と言ったり、感じたりするものにしたくないのです。本物の京都、本物の日本を経験して誇りに思えるようになってほしいと考えているのです。」それを受けて、仲田氏は「わかりましたお引き受けしましょう。あとは、息子と話を進めてください」と語って、プロジェクトはスタートした。



相当な時間をかけて醍醐寺研修の柱が決められた。それは諸君が経験したように

1. 僧侶との統一テーマをもとにしたワークショップでの討論
2. 金堂における声明と祈り
3. 森村生のための伽藍のライトアップと見学
4. 本物の京都文化の体験見学

5. 懐石料理

といったもので構成される。世界遺産の中でこれだけの研修ができる機会は森村学園だからこそ享受できる稀有なものであることは言うまでもない。高等部の京都修学旅行が導入された経緯は以上のようなものであるがこれも単独でできあがったものではない。表を見てわかるように中等部でも10年にわたって京都修学旅行が実践されている。この旅行に関しても当時の修学旅行を企画運営してきた先生方が「中学生に対して提供できる最良」の旅行を作り上げるのに心血を注いだ歴史が存在する。醍醐寺で行われた法話では「正直・親切・勤勉」を仲田氏はわかりやすくしっかりと含めてくださった。ここにも醍醐寺研修の原点がある。また、タクシーで研修をするという当時としてはスペシャルな旅行形態を導入したのも現在の修学旅行に受け継がれている。(写真は105期京都・奈良修学旅行)

京都・奈良旅行全体を見てみると長い年月の間に修学旅行につき込んだこだわりの集大成となっていることがわかるはずだ。こうした先人のはたらき、力を受け継ぐことが伝統であり、それを発展させていくことが改革だ。伝統と改革はこのように共存しながら脈々と受け継がれていくのである。

やがて、君たちが経験した修学旅行もこうした歴史の1ページの中に刻まれていくことだろう。いつの日か、もしかしたら君たちの子供や孫たちが森村生として再びこのキャンパスに来ることがあるかもしれない。その時まで森村は伝統を受け継ぎ、改革を繰り返していく。